

平成二十八年八月一日発行 第二十六卷第八号 通巻第三〇二号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

平成28年8月号

岡井省二創刊



魔

鏡

高橋将夫

影 生 ま れ 箱 庭 の 景 定 ま れ
滴 り や い つ か は 滝 に な る つ も り
御 意 の ま ま 御 意 の ま ま に と 行 々 子
武 者 人 形 恋 も 戦 と 思 ひ を る

どの顔で逢ひにいくのか業平忌
ロツクオンされてしまった黒揚羽
滴りが河童の皿を濡らしけり
夏霞毒にも薬にもならず
木陰ではゆつくり流れ夏の川
引力は亀の親子の間にも
梅雨の月魔鏡と神鏡相照らす

槐安集

水野恒彦

夜明けつつ燿歌かがびの山のニツ星
光溜め月日をこぼし槐咲く
まぼろしは何炎天の石舞台
時空から零れていたる蟾蜍
晩夏なり波が擢つてゆきしもの

加藤みき

松蟬や虹の松原風止みて
ペニシリン黴の御蔭と言ふことも
玫瑰や近づきすぎて万の刺
鯛網のはじまる前の大漁旗
万緑の鳥居の奥の冥さかな

中島陽華

ばあちゃんの朝のウクレレ八重櫻
目印はびわの玄関燕来る
耳の垢とれば雁帰るなり
濁手の赤絵の龍も夕おぼる
このごろは臙三味わろたわろた

竹内悦子

禅寺や阿吽の猪と緋目高と
九竅の穴能面に春の風
生き死にの話鯖鮓食べてをり
筆舐めて宛名書きする杜若
河童忌や刀の鏢の燻し銀



雨村敏子

谷の水ひかり八十八夜かな
はんざきを覗き込んで覗かるる
柏餅伊勢千代紙に包まれて
五月雨やピカソの青の海のいろ
まん中に闇かたまりし螢池

近藤喜子

おとがひの外れさうなる牡丹かな
触れたきよ天の白さの朴の花
薫風に足首やはらかく駆けり
身を守りゐる花栗の匂ひかな
蚊遣火や闇の窪みの腥し

本多俊子

ポロネーズ新樹の森に歩をとどむ
貴婦人の帽子のやうな海月かな
啄木になつて五月の砂すくふ
母の日や榎の木の影ふみながら
藍墨を磨る香に茅花流しかな

瀬川公馨

ひたすらに精進したる茅花かな
大川にすくとんと影の樟若葉
新玉葱のステーキはゆづれない
筍の皮むき十二単なら
暴君の立ち上りたる山つつじ

久保東海司

目借時開眼を待つたるまかな
白牡丹四方より闇の来て包む
風の向き変り相搏つ野水仙
一人来て言う事多し墓参かな
妻程に期待は持たず種を蒔く

柳川 晋

七月十四カトルズジュイユエ日血と暴力の千年紀
海ほほづき鳴りて大人に近づきぬ
川祓われら陰ほとより生れにける
挿木して見たこともなき花が咲く
麻衣天満橋より野崎まで

熊川暁子

臍の緒の付きしメロンが届けられ
登山靴自分さがしに行くといふ
揚げひばり絶頂からのプロポーズ
蟻走る古墳の遠き夢はこび
世の中をうまく泳げぬ水すまし

寺田すず江

山藤の領巾ひゆるやかにけぶりけり
万葉の風をうてなに山法師
茅花流しすべてを風にまかせたる
それとなく開き直りし蛇莓
白昼の静寂破りし蟾蜍

岩下芳子

一枚の布の手触り更衣
掌に天道虫の重さかな
光りつつ波にゆれたる螢烏賊
パンドラの箱の中より青嵐
梅雨樂し玉虫色の傘の内

近藤紀子

青葉まぶし子のしなやかな髪結ぶ
甘く湿る茅花を抜いてふふみたり
つややかな夏鶯聞く三溪園
女子会や海鞘食べながら死後のこと
春潮のうねり寄せくる湯舟真夜

岩月優美子

許さるる邪心どこまで白牡丹
筍やモディリアーニの長き首
棟咲き気高き靈の漂ひぬ
セイウチも人も卯月の風を吸ふ
紅薔薇や内なる命匂い立つ

竹中一花

白南風の運びし魚捌きをり
子の夢のでかさを語るソーダ水
青羊歯や太古の杜に太祝詞
茄子漬を供へし後の独りごと
ネプチューンの産みし塩なり胡瓜食む

前田美恵子

蛇衣を脱ぐしたたかにしなやかに
羅や女齡の鯖を読む
魂を吐き出し浅蜷煮られけり
孔雀草思ひの丈を語りをり
鮎釣の山より高く竿を打つ

中田禎子

生ビール一切を無に流しけり
虹色のドロップが好き柿若葉
ソーラーの鉄線続く芒種かな
陵の全景茅花流しかな
黒南風や山鳩のこゑ竜を呼ぶ



槐市集

柴田靖子

疲れ鶉も火の舞姫に躍らされ
螢火にさそひ出されし夢の道
羽抜鳥天にはばたき憂きことなし
寂として命の鼓動木下闇
大いなる力そそぎし夏木立

杉原ツタ子

声かけて一枝摘むや小判草
朝日子を手に受けてをり矢車草
五月雨の降り流したる観覧車
チケットと手引靴に榎の花
腸に染み入つてくる花蜜柑

高野昌代

奥伊豆の山葵に泣かさるその土産
春花火相模湾がに放つ三千発
翡翠の魚ついでいばむその速さ
来年の花へと繋ぐ剪定かな
閉じ方を覚へたもれや白牡丹

竹村淳

忘却の童心ひらくげんげ畑
一瞬を永遠なれと詠む桜
後悔は逃げ水のごと未練なり
陽炎は忘却の闇解きほぐす
花に生き花の下にて逝きし父



田 中 信 行

行く春や机の上に歎異抄
蕎麦を食み薫風浴びて山下の
啼き声はまだ鶯に成り切れず
たゆたへど沈まぬパリに夏来る
若き日の母蘇りたり柏餅

時 澤 藍

緑の日名もなき草のなかりけり
目こぼしの竹の子伸びる早さかな
夕日影浮き上がりたる麦畑
早苗田の水のゆりかご子守唄
薫風の色は何色濃紫

中 貞 子

棕櫚の花みんな良い子と誉め育て
雨上りの桐の花房見上げをり
豌豆の莢を飛び出す若き色
雨蛙牛の目玉のぬれぬれと
案内図に優曇華を見に来られたし

中 島 昌 子

風薫るドレミの歌のとほくまで
少女らの笑ひ転げる苜蓿
袴着せてやりたき蛙かな
眼光の鋭き仏青嵐
夏夕べ簡単レシピを立ち読みす

中 谷 富 子

泣き声の大物なりし初節句
トンチンカンばかりして居り豆の飯
皮を脱ぐ竹にうす目の羅漢さま
じりじりと十葉陣地広げけり
緑陰は小鳥のマンションささやける

中 堀 倫 子

風光をお花畑を一万歩
しがみつく子の足の裏バタフライ
うれメロンの皮の境目うすくきる
くたびれてそば茶いただく花の昼
蚊取線香同じところに置き薬

槐集

高橋将夫選

この人は水の匂ひす聖五月 大阪 有松 洋子

曲がらぬと決めて竹皮脱ぎにけり

巢立ちして孤独といふを身につける

炎ゆる矢やクピドは恋を知らぬまま

薔薇真紅世界ゆるがす恋したし

形代は息かけられて骨抜きに

炎昼やわたしのなかの発火点

夏衣真顔の笑みのブルドッグ

片蔭に着ぐるみ纏ふ男ぬて

油虫まさかばかりが人生よ

曇天とあはひの松風走り梅雨

屋形船夏を迎へにゆくといふ

今日見つめ明日を考へ種を蒔く

せせらぎに月の雫か初螢

行く春や触れてはならぬ人の恋

川上へ波押し上げる春嵐 福井 時澤 藍

満々の水にいやさる代田かな

一步引くゆとりこころえ姫うつぎ

何気なき一言重し花柘榴

夕日影熟れし麦穂の匂ひかな

青梅の光透ける日射しかな 枚方 中島 昌子

ふらここや生駒山系蹴り上ぐる

木下闇抜けるや時の動き出す

書を食みて博識なるやきらら虫

暗闇にひと筆書きの螢かな

今日と言ふ日の始まりよ松の芯 竹原 久保 夢女

帰る道無き大道を蝶過る

チューリップはらり壊れてしまひけり

てふてふや誰も浮いたり沈んだり

雑草と呼ばれて元気みどりなす

銀河往来 高橋将夫

◆槐集観照

この人は水の匂ひす聖五月 有松 洋子
カトリックでは五月は聖母マリアを讃える月。「水の匂ひす」
というから、この人はきつと聖五月にふさわしい清らかな人柄
なのだろう。

〈曲がらぬと決めて竹皮脱ぎにけり〉の句、竹の皮はみな内
側に曲がる。決めても思い通りにならぬのが世の中。〈炎ゆる
矢やクビドは恋を知らぬまま〉の句、なるほど恋を知らぬ子が
恋の矢を放っているのだ。〈薔薇真紅世界揺るがす恋したし〉
の句、クレオパトラのような恋をしたいと言われたら、黙って
引き下がるしかならう。〈巢立ちして孤独といふを身につける〉
の句、渡る世間は甘くないのだ。

形代は息かけられて骨抜きに 江島 照美

形代は誰で、息をふきかけたのは誰か。想像の世界が広がる。

〈夏衣真顔の笑みのブルドック〉と〈片蔭に着ぐるみ纏ふ男ぬて〉
の句、どちらもユーモラスで平和な世界。

一転して、〈油虫まさかばかりが人生よ〉の句は深刻。突然に油
虫が出るならまだしも、まさか地震、噴火、津波、テロが身近
で起こるとは。この世はまさかばかりといえよう。

屋形船夏を迎へにゆくといふ 高野 昌代

野崎参りは屋形船。作者は屋形船で夏を迎えに行くと言うか
ら、なんとも風流。夏は舟遊びに絶好の季節。

〈今日見つめ明日を考へ種を蒔く〉の句、実に堅実な人生観、処
世術。見習いたいと思う。

〈せせらぎに月の雫か初螢〉はまことに若々しい感性の一句。〈行
く春や触れてはならぬ人の恋〉は全くその通りと思う。「行く春」
が切ない。

川上へ波押し上げる春風 時澤 藍

強風に逆波が立っている景。春でも風は嵐なのだ。

一転して、〈満々の水にいやさる代田かな〉は静かな水田の景。
〈一歩引くゆとりこころえ姫うつぎ〉と〈夕日影熟れし麦穂の匂
ひかな〉の句も癒しを感じさせる。

〈何気なき一言重し花柊榴〉の句、心せねばと思う。〈以下略〉